

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4075500548		
法人名	有限会社ウエルハート		
事業所名	グループホーム幸生園		
所在地	宮若市龍徳1488番地		
自己評価作成日	令和7年1月2日	評価結果確定日	令和7年1月22日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートうりずん		
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号		
訪問調査日	令和7年1月16日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

おかげさまで設立から20年を迎えることができました。印象的だったのはこの2年間に約半数以上の入居者が入れ替わったことです。医療機関に入院となり退院が叶わなかった事例が多いですが、ご家族の皆様から園に戻してあげたいとの強いご要望をいただくことが多くそれだけ園がご本人の居場所だにご家族が認識して下さっていたことが、私達職員一同の励みになりました。入居者の入れ替わりによりまだまだ色々な活動が可能な方が増えました。その方の有する能力に応じて可能な限り自立した日々の営みが出来るよう支援するグループホームの強みを最大限活かしたケアの実践を強化し、感染症対策で控えていた外出や生花教室も復活を目指し入居者を笑顔にするケアに増々力を入れていきます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念を共有するために玄関の目につく場所に掲示し、理念の「明るく 優しく 元気よく」、「ありがとう」や前向きな言葉、ユーモア、笑顔で対応し、入居者を笑顔にするケアを実践している。生活歴、家族背景などを共有し、帰宅願望や被害妄想などをそのまま受け入れ、現状に沿ったケアがユニットを超えて日々展開している。良好な医療連携で訪問リハビリや尿留置カテーテルの管理、毎週輸血のための受診を支援し、本人や家族の意向に沿って、かかりつけ医や訪問看護との連携で今後も看取りを支援する予定であるが、既往症が悪化し入院先で先日逝去された方もある。毎月個別の暮らしぶりを写真を添えて報告しているファミリー通信は好評で、毎月返信を頂く家族もあるなど篤い信頼が寄せられ、能力を発揮できる環境やオンライン研修で人材を育成し、理念の「入居者らしく幸せなライフのサポート」を目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 さくら棟／グループホーム幸生園

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「明るく 優しく 元気よく」を理念に掲げ、本人そして家族に「ここに来て良かった」と思ってもらえるサービスを全職員で実践している。	理念を共有するために玄関の目に付く場所に掲示し、入職時に理念を説明している。年2回実施している自己評価で理念を振り返り、日々入居者を笑顔にするケアを実践している。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会には賛助会員として参加し回覧板を通じ交流。入居者募集の際は地域の掲示板を利用させてもらっている。近隣小学校との交流も継続している。またSNSを活用し園の情報発信を行っている。	地域密着型サービスとして、地元の入居者をさらに募りたいと、地域8ヶ所の掲示板に体験入居キャンペーンを掲示している。今年度も小学3年生の社会科見学の場となり、地域同業者協議会の会員でもある訪問マッサージ業者と協力し、公民館で健康体操教室開催を構想している。	理念の「地域との触れ合いを大切にします」を実践するために、小学校とのオンライン交流の再開や健康体操教室開催を期待します。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会に賛助会員として参加しているが園から地域に向けての発信が実践できていない。同じ町内の入居者もいるので、まずは自治会内に向け他事業所に協力を仰ぎ地域貢献を図りたい。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ以前の対面形式での運営推進会議に戻り運営報告を実施している。コロナ禍においてしばらく対面での実施を控えていた影響なのかメンバーの欠席が多い状況となっている。	家族や関係部署職員の参加はあるが、自治会加入の減少や役員の役割増加に伴い、地域代表の参加が難しくなり、会議録を送付している。入居者の暮らしぶりや運営状況、ヒヤリハットなどを報告し、参加者から伺った意見やアドバイスは運営に活かしている。会議録は玄関で公表している。	運営推進会議設置目的に勘案し、メンバー夫々が参加しやすい年間開催日時の組み合わせや議題の検討を期待します。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議では毎回参加いただき事業所の現状や取り組みを伝えている。また毎月市の担当課より入居の空き状況の確認があり市のHPで公表され入居者獲得への協力関係がある。	空き室情報が市のホームページに掲載され、地域包括支援センターから相談を受け入居に至った入居者もあるなど、日頃から連携や協力に取り組んでいる。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者の行動を抑制するのではなく行動の予知やリスクの軽減を図るため、センサーの使用や低床ベッドの利用を行っている。その他、役割提供や楽しみの提供などを実践し身体拘束しないケアに取り組んでいる。	運営推進会議で身体拘束適正化委員会を開催し、オンライン研修の動画視聴後にテストを受けている。家族の了解を得て、居室にセンサーや低床ベッドを使用し、入居間もなく洗面所の窓から外に出て行かれた入居者には、日々言動に応じた支援が展開している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修については専門講師による動画教材を使用し基礎～応用まで学んでいる。動画は繰り返し視聴することが可能なためいつでも好きなときに再学習することができる。			

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人のついている入居者が1名在籍。職員は制度の詳細についての理解が浅いが、後見人がどのように入居者、園との関わりを持っているかを知ることによって制度の必要性などを学んでいる。	後見制度を利用されていた方は先日入院先で逝去され、介護現場で働く社会福祉士の後見人は、遺骨の引き取り先までも支援されている。近々制度利用者が入居予定で、後見制度を学ぶ機会となると管理者は話している。	今後さらに多様な家族構成が予想されることから、成年後見制度のみならず日常生活自立支援事業の夫々の内容やその違いを学ぶ機会を持ち、さらなる権利擁護を期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書面による説明の他、写真や動画などを活用して入居者の園での生活の様子やレクの様子などを実際に見てもらうことで園での生活の姿がイメージできるよう工夫している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	厨房職員は入居者に献立の要望を聞き食事提供に反映している。家族からは支払時など対面する機会やプラン説明の際に要望等をヒアリングしている。	入居者の要望を支援し、毎月発行の写真を掲載した個別のファミリー通信やブログで行事や暮らしぶりを報告している。希望に応じてキーパーソン以外の家族にも送付するほどファミリー通信は好評で、毎月返信を頂く家族もある。訪問時入居者のラジオから流れる高音響の曲に、家族から「懐かしい」との声があった。	毎月家族に送付されている個別便りに運営推進会議内容を掲載し、会議の設置目的の周知ともに、運営にする意見表出の機会となることを期待します。
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者を含め職員全員が現場に携わっているため職員からの意見や要望を常に聞き取れる環境がある。連絡ノートを活用し意見や要望を共有している。	ユニット会議のみならず日頃から相談や提案ができる環境を整備し、連絡ノートで意見や情報を共有している。全職員の了解を得て処遇改善加算を取得している。職員体制を考慮して入浴の時間や人数を随時変更し、シャワーチェアや車椅子など物品を購入している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の自己評価を実施しておりその結果を踏まえ職員個々の評価や給与水準の見直しなどを行っている。公平な職場環境や条件の整備に努めている。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	今年度は育児休業を利用した職員もおり5月頃の職場復帰を目指し子育てに奮闘している。また介護職として勤務歴のある定年の70歳をこえた職員を厨房として再雇用もしている。希望休制度も採用し柔軟な働き方が出来るよう配慮している。	20代～70代までの男女の職員が職安や民間サイトを通じて入職し、常勤や非常勤、夜勤専従など夫々の状況に応じて勤務している。希望のシフトや休暇が叶い昼休みを休憩室でとり、オンライン研修を受講している。「働きやすいし、職員が優しい」と、派遣から入職した職員は、認知症基礎研修を修了し、提案したカップケーキ作りは2回実施するほど好評で、特技を活かして生き生きと就労している。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	オンラインの動画教材を使用している。動画は繰り返し視聴が可能のため再学習の機会がいつでも用意でき啓発に取り組んでいる。	スマートフォンやパソコンで何度も視聴可能なオンライン動画による虐待防止研修の受講や、大声に関する項目もある自己評価を年2回実施し、人権教育や啓発活動に取り組んでいる。	入居者と職員の人権擁護は同義であることから、カスタマーハラスメントを組み入れたハラスメント指針の整備や周知を期待します。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実 際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会 の確保や、働きながらトレーニングしていくことを 進めている	内部研修ではオンラインの動画教材を使用 し職員の研修負担の軽減に取り組み、外部 研修では代表者が自ら研修に参加し研修内 容を職員に周知している。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機 会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問 等の活動を通じて、サービスの質を向上させてい く取組みをしている	GHみやわかに参加しているが、入居者の介 護ニーズが多岐にわたり対応に追われる傍 ら毎回の参加が難しくなっており今後は改善 に努めたい。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っ ていること、不安なこと、要望等に耳を傾けなが ら、本人の安心を確保するための関係づくりに努め ている	施設見学は本人にも参加していただく。医療 機関に入院中で外出が困難な場合はこちら から出向き本人との面談を行う。その際は家 族にも同席いただき安心感を与えるよう配慮 している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が 困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾け ながら、関係づくりに努めている	家族には園での入居者の生活を様子を写真 や動画で紹介し、言葉だけでなく実際の姿を 見ていただくことで、本人の園での生活がイ メージできるよう工夫している。入居前の体 験入居も対応している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等 が「その時」まず必要としている支援を見極め、他 のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅生活が困難になり家族は施設入居させ たいが週1回の受診が欠かせず入居を断ら れる心配があった。園では家族と話し合い家 族の協力を得ることもお願いし入居を受入れ 週1回の受診を支援する。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、 暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員の忙しそうな姿を見て入居者が自発的 に手伝いを申し出ることがあるが、そ の時は感謝を伝え助けていただくことで関係 性の構築や仲間意識を育んでいる。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、 本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支 えていく関係を築いている	幸生園ファミリーだよりを毎月発行し家族と は常に情報交換を行い、必要な時はケアに 協力してもらっている。家族の中には毎月お 手紙を下さり、家族の気持ちや近況などを知 らせていただいている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	毎週厚労省から発表される定点報告数を確認し園の基準をクリアしていれば対面面会を可能にしており、家族や馴染みの友人などと顔を合わせ関係が継続できるよう支援している。	一昨年8月クラスターが発生し対応に苦慮した経験から、インフルエンザは10、コロナは5の定点報告数を基準として、予約や時間設定や制限も設けた対面面会を理解や協力をお願いしている。携帯電話使用者には充電を支援し、使用されていない携帯電話は、家族の了解を得て解約を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係支援のひとつとして座席配置はお互いの関係性を考慮し決めている。トラブルがある場合でも簡単に席を変えて解決するのではなく、孤立しないよう配慮している。		
24		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された方の初盆まではお供えを送るなど関係性を維持している。園での生活の様子を写真や動画に残しており、退居時にはそのデータをDVDなどで贈呈し家族から喜ばれている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	医療機関に入院中の妻を園に呼んで一緒に暮らしたいという希望を持つ入居者がいる。実現はしていないが家族とはその選択肢も検討しており、今後の状況次第では希望が叶う可能性もある。	生活歴、家族背景などを共有し、帰宅願望や被害妄想などの言動はそのまま受け入れ、ラジオで野球や好きなタレントの歌を聴きながらカフェオレを飲む習慣を継続し、食事は自室でもなど、全盲の入居者の思いや意向を支援している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	自宅でのラジオの野球中継を聞きながらカフェオレを飲むことが楽しみという習慣を園でも継続して支援している。家族からは「家と同じです！」と喜びの手紙をいただいた。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個人記録、食事・水分チェック表、排泄チェック表を毎日記録しており個々の入居者の現状把握を行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各ユニットの計画作成担当者が中心となり作成している。計画作成担当者は現場介護にも携わるので課題やケアについて介護職と常に意見を交わせ現状に即した計画作成に努めている。	入居者や家族の意向に沿った課題を分析し、担当職員の気づきや介護支援専門員のアドバイスを共有しながら、現状に沿ったケアが日々展開している。「帰りたい」には皿洗いなどの役割や楽しみを作り、傾聴で不穏を軽減し、職員が「有難う」を繰り返し、「こちらこそごめんね」と介護抵抗が軽減している。	難聴に配慮した声かけや伝達内容の理解度の確認、手指の皮膚むしりなど自傷行為を詳細にアセスメントし、BPSDの出現防止や早期対応で、理念のさらなる「入居者らしく幸せなライフのサポート」を期待します。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、連絡ノート、往診日誌、訪看の訪問記録を共有しケアの実践に取り組んでいる。職員においては家族に向けた幸生園ファミリーだよりの作成時に1ヶ月の振り返りを行っている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	定期的に輸血が必要な方がおり毎週の受診が必要なためその支援を家族に代わり行っている。輸血の日は6時間近く受診に要し事業所の負担は大きいが本人のニーズに対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前は地域のボランティアや幼稚園、小学校との交流が盛んで地域資源との協働を実践できていたがコロナ以降感染症対策の影響もあり以前のような外部との関りが難しくなっている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には園のかかりつけ医の往診を受けてもらう契約だが、かかりつけ医では対応が難しい場合や専門外の場合はかかりつけ医以外の主治医とも連携し医療面の支援を行っている。	協力医療機関や専門医療機関の訪問診療や受診の支援、訪問看護による健康管理で適切な医療受診を支援している。訪問リハビリや留置カテーテルの管理、毎週輸血のために受診するなど、医療連携が必須となっている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問看護ステーションからの看護師訪問があり、入居者の健康状態を報告している。表皮剥離など処置が必要な場合には臨時の訪問により適切な処置が受けられる体制を整えている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院の際は担当の相談員とは早期に退院受入れの最低ラインを提示することで早期退院を促進している。退院後も1ヶ月を目安に退院後の経過報告を行っており病院関係者と良好な関係づくりを行っている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に指針について説明を行っている。令和5年1月の看取りを最後に実施はない。その間も重度化により家族との話し合いの事例はあったが家族の意向を尊重し医療機関や他施設への転居などを支援した。	今後も本人や家族の意向に沿って、かかりつけ医や訪問看護と連携し、看取りを支援する予定であるが、先日入院先で逝去され方は、協力医療機関でもある入居前からのかかりつけ医の勧めで入院されるなど、昨今既往症の悪化や医療的ケアが必要となり、入院や介護保険施設への転居が増えつつある。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変・事故等の際の緊急連絡網を定めている。訪問看護ステーションの看護師と連携体制があり、対応についての指示を24時間体制で受けることができる。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施している。日勤帯、夜勤帯それぞれの時間帯を想定しパートも含め全職員が参加している。過去のグループホーム火災などの事例や資料を活用し学んでいる。	夜勤帯を含め年2回避難訓練を実施している。消火器を使用し、火災感知器を交換している。備蓄一覧表で飲料水や食品、衛生用品、感染予防グッズを整備している。一昨年夏のクラスター発生時は防御服不足を経験し、3月までにBCPの机上訓練を予定している。	地域との協力体制を構築するために、運営推進会議でBCPの研修やシミュレーションにおける課題や対応について報告されるとともに、市の防災体制に関する情報把握を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	悲観的な発言の多い入居者には常に前向きな言葉で接し、ユーモアも交えながら自然と笑いや笑顔が引き出せるように言葉かけを工夫している。	優しい声かけひとつで入居者の言動が変化することを熟知している。「ありがとう」や前向きな言葉、ユーモア、笑顔で対応し、入居者の誇りを大切にした支援に取り組んでいる。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者から外に出たいという希望が出た際は可能な限り支援している。例えば外出や散歩に出かけることが難しい場合に園の中庭に出て花壇の花を鑑賞したりと屋外に出る機会を提供している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	居室で小説が読みたい方、居室でラジオやCDを聴きたい方はその希望に合わせて支援し、特に希望のない方は一緒にレクをするなど入居者が孤立しないよう配慮し対応している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	約2ヶ月以内のペースで訪問理容にてヘアカットを中心に希望者にはヘアカラーにも対応している。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者揃ってカップケーキ作りを一緒に行うなど入居者参加型の支援に取り組んでいる。入居者の自立度に応じて簡単な作業から少し高度な作業まで皆が参加できるよう配慮している。	週4日は厨房で手作りし、その他は業者搬入であるが、嚥下や咀嚼に応じた食形の食事を用意し、自室や食堂で見守りや声かけ、介助を受け夫々のペースで全量摂取している。仕事として手際良く食器洗う入居者もある。ファミリー便りにはカップケーキ作りを楽しむ入居者の写真が掲示されている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分チェック表を活用し1日を通じて食事量や水分量を把握している。飲み物は6種類から選べ、食事形態もミキサーや刻みなどに対応し個々の状況に応じた支援を実施している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは毎食後実施している。全介助、一部介助、自立と個々の入居者の状況に応じて対応している。専門的な対応が必要な場合は訪問歯科へ依頼して治療も行っている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	入居時はオムツ着用で寝たきりに近い状態だったがトイレに行こうとベッドから降りようとする行動あり、紙パンツに変更し職員2名でトイレに座って排泄できるよう支援方法を変更している。	尿意はあるが、排泄に関する一連の行為は全て介助が必要など、夫々の排泄パターンや特性に応じた排泄を支援している。尿路感染を予防する食品の摂取支援で感染がなくなったり、ポータブルトイレを使用している全盲の入居者は、職員の後始末の手間に配慮し排便回数を減らしていると話すなど、対応に配慮している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量のチェックは毎日実施し1日1000mlを下回らないよう注意している。必要な場合にはその方の状況にあう便秘薬を使用し、排便間隔が3日以上開かないよう取り組んでいる。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	週2回実施し、曜日は固定させてもらっている。ゆっくり入りたい方は順番を最後にしたり、入浴拒否の方は一番風呂にしてみたり個々に応じた支援を実施している。	週2回個浴槽で、冬至はゆず湯でと季節を感じる入浴支援をしている。入居当初頑として入浴を拒否していた入居者は、今では声かけや早めの入浴でスムーズに入浴を楽しんでいる。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	リビングで傾眠が多い入居者は昼食後は居室で90分程横になったり、夜の入床前は排泄を介助し安心して眠れるよう支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	専任の薬剤師がおり入居者の服薬管理を行っている。服薬支援における助言や指導を受けている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全盲のためラジオ鑑賞が楽しみの一つで夕食後、カフェオレとお菓子を提供しラジオで野球鑑賞を楽しめるよう支援をしている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外への外出が難しいため園の中庭の花壇の花を季節ごとに植え替え天候の良い日は皆で外へ出て鑑賞できるように支援を行っている。	食材の買い物や下着の購入と一緒に出かけたり、天気の良い日は園庭を散歩し、正月明けは数名で神社参拝にドライブをしている。伴侶の初盆や1周忌に外出予定の入居者もあり、誕生日のプレゼントとして他市の猫カフェに出かけるなど、個別の外出を支援している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人がお金を持つことはないが預り金という形で事務所の金庫で個人毎に管理しており、本人からの要望に応じて預り金から本人が欲しいものを購入できるようにしている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	園の電話を使用し家族や友人との会話を出来るよう支援している。帰宅願望の強い方の場合、家族と電話で会話することでその症状の軽減を図っている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のリビングでは加湿器を設置し乾燥に配慮している。壁には季節の飾りを施したり、音楽を流したりなど居心地よく過ごせる工夫をしている。	玄関には職員紹介の顔写真が掲示され、季節の生け花や笑顔の職員が訪問者を出迎えてくれる。居間には傍の厨房から美味しそうな匂いが漂い、レクリエーションの作品が壁に飾られ、昼食後は食器洗いに勤しんだり、職員と作品作りの準備をしたり、車イスに座って静かに微笑む入居者もあり、穏やかな時間が流れている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングでの座席配置は入居者同士の関係性を配慮して決めているが、会話を楽しみたい時は自由に席を移動できるよう支援している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	亡くなったご主人の位牌を居室に持ち込んでいる方がいる。認知症の進行もあり入居に際して理解ができていないため帰宅願望など入居前は心配していたがそのような症状は一度も出ていない。	入口に入居時本人が手書きした表札が掲示された居室は、ベットや大きなクローゼットが設置され、どの居室も清掃が行き届いている。ベットに座ってラジオに耳を傾けたり、位牌の持ち込み、猫の写真や置物、誕生日プレゼントで行った猫カフェの写真が所狭しと飾られるなど、居室が夫々の寄り処となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	バリアフリー及び廊下には手すりを設置しているので、支えがあれば自立歩行可能な方は自分の力で安心して歩行することができている。トイレの場所もわかりやすく表示をつけて工夫している。		